《入選》

「差別」への意識

彦根中学校 二年

山田 やまだ いろは さん

差別をしている人は、自分が「差別をしている」ことに気づいていない。どんなときでも自分が正しいと思いついでいて、結局、差別された側の人が傷ついて終わるだけだ。たとえ、自分は差別していると認識していたとしても、「自分は悪くない。相手側にも何か問題はある」と相手手を否定する。なぜ、人は差別をするのか疑問に思い、考えてみた。過去を振り返ってみると、私も差別のような行動をしてしまったこともあるし、されたこともあった。私は差別されたときのことをはつきりと覚えていて、そ

のことを思い出す度に悲しくなる。でも、差別をしてしまったときのごときは、今振り返らなければ私は一生思い出すことはなかっただろう。それくらい、差別をしている側の人には自覚がないのだ。

差別をしている人は、よく「相手側にも何か原因があるから差別されるんだ」と言う。正直、私も前までそう思っていた。しかし、学校で人権問題について考え、みんなと話し合ったりしているうちに考えは変わった。

以前、ニュースを見ていると、「旧優生保護法」について書かれてあった。旧優生保護法とは、不良な子孫の出生を防止し、母性の生命、健康を保護することを目的として定められた法律である。私はこのニュースを見たときにとっても衝撃を受けた。国が差別を認めるのか、とただ驚いた。みんな同じ人間で命の重

みは同じなのに、障がいを持った人たちだけが差別されるのは絶対におかしいし、むしろ、国はその人たちを助けてあげなければならぬ立場なのでは、と思った。昔の日本はまだ障がいについての知識が広まっておらず、障がいは親から必ず遺伝するもので、障がい者は無能な人たちだと思いついでいたのだろう。障がいについての知識をしっかりと身につけていたら、こんなに辛いことにはなっていないと思う。

差別は今なお続いている。差別をなくすためには何をすればよいのだろうか。私はまず、いままでの自分の行動をふり返って何が本当に正しいのかを判断する。そして、相手と向き合い、受けとめ、認めることが大切だと思う。そのためにも、今の私たちは正しい知識を身につけ、しっかりと判断できる人間にな

らなければいけない。お互いがお互いを理解し、尊重し合えば、この社会から「差別」という言葉はなくなるのではないのだろうか。